

音

による臨場感の研究を行っている。私の研究目標は、家庭で臨場感の高い音を再生するための技術を確立することである。その関係で、楽音のデモンストレーションを行うことがある。最近、試聴者には二種類の典型的な例があることに気がついた。一つは、いわゆる音のマニアと呼ぶべきか、本当に音がお好きなのは良く分かるのだが、やや思い込みがあるようにお見受けする方である。もう一つの例は、音のデモを聴くことが耳のテストをされるように思われるのか、「音のことは分からないから」と言っただけで逃げてしまうような方である。

音の違いが分かるという言葉は良く耳にする。例えば絵画などは見比べることができ、音は時間と共に過ぎていくため、音の聴き比べは記憶に頼ることになる。ところが、音の情報を細部まで記憶しようとしても限界がある。そうすると、音の違いが分かるかどうかは、どこに注意を集中するかによって決まる。つまり、聴き所を知っているかどうかは依存する。

聴覚は、全方向からの情報をキャッチできるが、視覚ほど細部まで観察できる感覚ではない。音が気について、そちらに目を向けることで対象物をきちんと確認するというのが、両感覚の本来の役割分担かと思われる。音は、声のような言語情報を伴う音と、言語情報を伴わない音に分けることができる。私が扱う音はどちらかという後者になるので、その受容は、個人の

各 人 各 説

音について思う

富山大学大学院 理工学研究部(工学) 教授

安藤彰男

Akio Ando



主観に頼らざるを得ない。

人間の主観を説明するのは、大変難しいことである。聴いた音に感動したとする。でも、これを他人にどう伝えれば良いのであろうか。この感動を伝えるため、私たちは、自分の持つ語彙をフルに活用する。この表現が複雑になればなる程、どうして感動したのか分からない者にとっては、理解できない状態に陥る。その結果、冒頭で述べた二種類の方々が互いに乖離していくように思われる。このような乖離を防ぐためには、臨場感のある音、良い音を聞く機会を増やすことが大切である。

最近では、ヘッドホンで音楽を楽しむ人が増えているようである。音の臨場感、音波が伝わってくることによって生じるが、その受容が聴覚のみで行われているとは限らない。二〇一五年八月から、NHKがスーパーハイビジョンに関連して、二・二・二チャネル音響の試験放送を開始した。わが国は、立体音響の先進国である。スピーカーによる音響再生は周りへの配慮が必要であるが、立体音響を家庭で楽しむ環境をどうやって確保するのか、建築の関係者とも相談しながら検討していきたいと考えている。

最後になるが、読者の中に、音のデモンストレーションがあると逃げて行ってしまおう方がおられたら、音が分かるか分からないかは慣れの問題なので、逃げずに耳を傾けていただければと願う次第である。